

氏名(本籍)	金 善 和 (韓 国)
学位の種類	博士(感性科学)
学位記番号	博 甲 第 5788 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	美術の学習経験による色使いの変化の感性的評価
主 査	筑波大学教授 博士(感性科学) 山 中 敏 正
副 査	筑波大学教授 Ph.D. 小 川 園 子
副 査	筑波大学准教授 博士(デザイン学) 五十嵐 浩 也
副 査	筑波大学教授 逢 坂 卓 郎

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### (目的)

本研究は、感性が潜在的に関与すると考えられている創造活動において、長期潜在的因子としての経験と短期直接的因子としての絵画鑑賞体験がそれぞれどのように創造活動に影響しているのか、実験を通じて明らかにしようとしたものである。

### (対象と方法)

被験者の経験要因として年齢と美術教育体験を取り上げたことから、被験者は子供(未就学児)と大人(大学生)とし、対象や絵画鑑賞体験の題材を変えつつ複数回の実験を行った。基本的な実験のプロセスは、(1)塗り絵、(2)絵画鑑賞、(3)塗り絵 であり、予備実験で絵画の種類による違いを把握して、絵画鑑賞体験として適切な絵画を絞り込み、本実験では成人と子供、美術の学習体験の有無について、(1)と(3)の比較、(2)の種類による比較、被験者の経験による比較を行った。短期的直接因子である絵画鑑賞においては、色づかいが全く異なる抽象画(予備実験では10作品、本実験では単純化された幾何形体と色が特徴のモンドリアン作品)と印象派(予備実験では10作品、本実験では複雑だが純色の組み合わせで表現されたモネ作品)を用いて、色合いと表現方法の違いによる影響も探ろうと試みている。

### (結果)

成人と子供の比較では、絵画鑑賞体験後成人は色数が減り、子どもは増える傾向が見られた。色量では成人は青色系、子どもは原色の使用量が多かったが、刺激後成人は鑑賞した絵画にある色を中心に色量が増加した。この傾向に抽象画、印象派の区分内で絵画による差が見られなかったため、代表的で対照的な絵画を抽象画、印象派各1点を選び、続く実験に用いた。

美術の学習経験について行った研究では、絵画鑑賞体験の影響を確実に把握するために、鑑賞体験無し、無彩色化した絵画鑑賞、有彩色の絵画鑑賞を行い、結果を比較した。結果、絵画鑑賞を行わない場合は2回の塗り絵の共通性が高く、無彩色絵画鑑賞体験の場合は表現に使われた色数が減少した。有彩色絵画鑑賞体験後は全体としては被験者が用いる色数が減少する傾向が見られたが、使用色毎に見ると、鑑賞絵画に多く使われている色については多く使用されており、その他の色が大きく減少した結果であった。こうした傾向

は美術系の専門に所属する学生に顕著だった。

ここで見出した傾向は、色数及び色量の計測から得られたものだが、塗り絵の評価は単に色の計量だけで測れるものではないため、あらためて20名の評価者による絵画鑑賞体験刺激と塗り絵の比較を行い、その影響の程度を判断する評価を行った。

その結果、成人の実験結果において、絵画鑑賞体験前は個人によって異なる色彩表現を用いていたが、体験後には刺激は被験者の色使いに影響を与えることが明らかになった。また、被験者の美術に関する学習経験は色使いの変化の程度に影響を及ぼすことも明らかにした。すなわち、被験者の美術学習経験が多く美術に対する関心度が深いほど鑑賞体験した刺激との類似した色づかいに変化する傾向が高く見られ、刺激による色使いの変化がより明確に見られたと考えられる。

#### (考察)

本研究では、主に絵画鑑賞という体験を用いて、その前後における色差表現の変化を比べることによって体験の影響を測ろうと試みたが、全体としては体験した絵画の影響を受けて表現が変化する傾向を確認できた。こうした傾向が美術教育の経験者により顕著に見られたことが教育による感受性の変化や鑑賞態度の形成などの原因かどうかはこの研究では測ることができないが、少なくとも鑑賞という体験によって人の表現の質が変わりうることを示すことができた。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、体験と創造活動という、きわめて複雑で分析の困難な対象を研究しようという意欲によって成されたものである。特に、限定的ながら創造活動の指標として塗り絵を用いたことにより一定の条件で創造活動の比較を行い得たことは本研究の意義だと考えられる。塗り絵に表された色数や色量の計測結果と刺激に用いられた絵画の色づかいの傾向の分析や、塗り絵の絵画鑑賞体験の影響度の評価方法、さらには、被験者間の違いの検定など、今後の改善を望むべき部分は多いが、絵画鑑賞による創造活動の質的变化を捉えたユニークな研究であることは評価に値する。

よって、著者は博士（感性科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。